



風紀委員
相羽瑞穂の
屈辱

神楽陽子

表紙イラスト：みかん。

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『風紀委員長 相羽瑞穂の屈辱』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



風紀委員
相羽瑞穂の
屈辱

神楽陽子
表紙／みかん。

登場人物紹介

Characters

あいばみずほ

相羽瑞穂

私立相羽学園の理事長の孫娘。自分が将来受け継ぐ学園のため、学園の風紀を乱す不良生徒をこらしめている。

かなざわごんこ

金沢吟子

瑞穂に停学処分にされた女生徒。瑞穂のことを逆恨みしている。

わたなべ

渡辺

相羽学園の学園長。

わたなべけい

渡辺啓

瑞穂の部下の風紀委員。

宝石箱を開いてみれば、中はがらくた。世間では全国レベルで「名門」と称される私立相羽学園も、華やかなイメージとは裏腹に、きな臭い病魔を抱え込んでいた。

オフィス街であたかも、大手会社の本社ビルそのものに聳え立つ校舎が、日中は薄暗い影を広げる。政治家、資産家御用達の相羽学園に通う令息令嬢には、一部とはいえ、深刻な悪事に手を出す者が後を絶たない。

月曜日の放課後、裏庭でたむろする男子が、読み飽きた雑誌をライターで燃やす。

「ヘッ！ B組のお坊ちゃん、万引きで大騒ぎだよ」

「いるんだよな、そーいうバカ。それよりオイ、例のブツはいくらで売れた？」

若者の不祥事で一般的なのは、喫煙や窃盗だろうか。ところがここ相羽学園では、覚せい剤や違法DVDの売買といったレベルの犯罪が、生徒間で横行しているのである。

「売れた、売れた！ 相場を知らない客ですよ。今月は二倍は稼ぐぜ」

「調子乗んなつーの。俺なんか詐欺でボロ儲け」

そのうえ、若いだけあって行動に慎重さが無い。相羽学園は名門校の仮面を被った一大ブラックマーケットと化し、裏の世界に知られ始めてもいた。

「今夜はどこいく？ 腹減ったし。稼いでんなら奢れよな、お前」

「お前だって金は持つてるくせに、よく言うぜ……うわっ!？」

そちらの業界で荒稼ぎする不埒な連中の雑談に、ヒュンツと何かが割り込む。

「そこまでよ！ C組の伊藤、他数名！」

ライターを回収し、頭上へと戻っていったのは新体操用の赤いリボン。

校舎二階の窓から身を乗り出す彼女は、手品の速さで制服を脱ぎ捨て、四メートルある高さを飛び降りた。ネイビーブルーのロングヘアを、さながらマントのごとく翻し、ハイヒールでも安定して着地する。

先ほどまでは調子づいていた男子たちが、うろたえた。

「風紀の相羽？ な……なんだってここに」

「隠れ場所にはベタすぎるのよ。無能さに呆れるわ」

尊大な物言いに話し相手は臆病になる。後ろを向くこともせず、押収品のライターを背後のゴミ箱に投げ入れた風紀委員長、相羽瑞穂は、鞭代わりのリボンを引き絞り。数だけの小心者をねめつけ、脅迫じみた二択を叩きつけた。

「潔く投降するなら、少しは哀れんであげようかしら。わたくしに従うも抗うも、どちらで生き恥を晒すかは、あなたたち次第」

高圧的な態度が直立の姿勢を正し、瑞穂のボディラインを引き伸ばす。百六十二センチの肢体を構成する曲線には、流麗な波があり、女の形を完璧に描き上げている。

しかも彼女の着衣は極端に生地が薄く、色白の肌に視覚的に溶け込みそうなくらい、仮に下着としても染料不足のレオタード。紫といってもバイオレットでは色が濃すぎる。

淡いラベンダーカラーのレオタードはしかも、面積を最小限まで削り、かろうじて恥部を隠す挑発的なデザインである。女の身体を「魅せる」のが本来の用途であり、ハイレグの際どいラインは、腰の捻りによっては急降下そのもの。

五十二センチまで括れたウエストは、瘦せたものとは違った悩ましきで、瑞々しい肉体を逐一くねらせる。左手を腰に当てるポーズで威風堂々としているだけでも、脚の長さが明らかに映え、レオタードから食み出す太腿は、加減よく熱せられた茹で卵のように肌を白く照り返らせた。

パシン、と一発の鞭打ちが足元に入り、現場の空気を緊張させる。見た目通りの布ではなく、ステンレス製の素材で節を作り、先端に適度な重量を持たせることで懲罰の武器となった、風紀委員長の締め道具。

「十秒以内に今後の学園生活を決めなさい。わたくしは忙しいの」
「くっ……」

戦闘スタイルとなつても、あくまで模範としてネクタイは外さない。タイピンと左腕の腕章も風紀委員のアクセサリだ。しかし品行方正を語る各パーツはかえって、腰から上にギャップを持たせ、瑞穂本人も自覚している。Fカップのブラジャーですら規格外の、九十六センチのたわわな乳果実は、何よりの自慢だった。

体感的にずっしりと重たい割に、脂肪にありきたりの無駄な緩みは一切なく、曲線は見

事に美しい。それをさらに、ボディスーツのストラップが引き上げる。瑞穂の一拳手一投足にたぶん、と揺らされても、元の形を取り戻す弾力性は優れもの。

それだけ女肉を育ませていても、肩は華奢で腕も細く、令嬢のたおやかさを高次に共存させていた。男子生徒に詰め寄る足の運びは、社交界の式に出向くかのようなであり、ハイヒールの踵は必ず垂直に立つ。

歩く際にはスリーサイズを八十二センチで締め括る、量感あるお尻が、むっちりとした太腿に連動し、谷間の薄生地を振らせる。

お尻の丸みをくすぐる長さのストリートヘアは、吹く風の向きを追って横に流れた。
(戦闘服は上出来ね。丈夫だし、わたくしの存在を皆にアピールしてくれるもの)

この姿でいることは、肉体の優越を実感できて心地よい。自然と余裕が表情になり、眉目秀麗とした優等生を自信家に変える。

青柳の眉を引き締める気丈な瞳は、決して敵の隙を見逃さず、整ったフェイスラインを崩しかねない苺色の唇は、必要最低限にだけ開いて綺麗な歯並びを覗かせた。

「タイムオーバー。あなたたちはわたくしの練習台に決定だわ」

得意の威圧で相手を尻込みさせているうちに、距離を詰めて、グローブで保持力を強化した右手のリボンを、頭上で大きく旋回させる。素手の左手は腰からお尻、太腿のラインをなぞるように滑り落ち、しなやかな肢体は短距離走者の前傾姿勢に。

「た……たかが女ひとり、何ができるってんだ？　いつ、いくぞ、お前ら！」

「そっそうだぜ。殴られたからって泣くんじゃねえぞ、風紀委員長サマ！」

教師以上に厄介な風紀委員長に見つかり、進退の窮まった男子たちは、一対多数に物言わせ、喧嘩を選んだ。しかし所詮は金持ちのどら息子、へっぴり腰からパンチを繰り出すつもりらしい。

「実力以上のことをほざく馬鹿ね。格闘の作法を教えてあげてよくてよ、たあッ！」

リボンが視界を横切った瞬間、瑞穂の左足はすでに地面を蹴り上げていた。彼らの後方にある大木の枝へと、体操リボンを先行させて。後から武器の伸縮性をバネにして、そこへと飛び乗り、男子全員の首の向きを反転させる。

「がふっ!!」

うち一名は顔面を押さえ、倒れてしまう。位置取りのついでに顔面に打ち込んだ膝蹴りはクリーンヒット、それが見えたのは、瑞穂本人だけだったようだ。

「こ、この女、今何しやがった？」

「口で教えるより、身体に叩き込むほうがわかりやすいかしら」

太腿をびったりと合わせて逆さに、枝にぶらさがり、ストレートのヘアが舞うより早く次のアクション。たわめた肉体の反動を利用して、弾丸のごとく急降下し、軌道上の男子の襟首を、くるぶしでがっちり挟む。

「はっあああああ！」

ズドオン！

着地の寸前で相手と上下を入れ替え、頭部だけを一点集中に踏み台にするフェイスクラッシュだ。実戦的かつ優雅な離れ技に、残った数名の男子がたじろぐ。

「ウソだろ!? ゲームかなんかじゃねんだし……がつ！」

迂闊な顎に肘鉄を打ち込み、相手の脳に振動を与える。続けざまにターンして、小気味よく双乳を振りまわしつつ、片脚を屈め、リボンでアルファベットのXを刻む。

「遅いのよ、どいつもこいつも！」

ビジネス街に入り込んだ無頼者を相手にしたこともある瑞穂にとっては、幼子を窘める程度のこと。ただし小悪党相手に手加減はない。

野生の狼と競える瞬発力と俊敏さで、立ち位置を細かく変えていく。喧嘩を知らない者ではとても追いつけず、波打つリボンとロングヘアにかく乱され、瑞穂と目が合った時には、すでに強烈な一撃が放たれていた。

「残念ね、今度は下！」

アクロバティックに左手で斜めに逆立ち、鋭いハイキックで、またも男子の顎をかちあげる。顔ばかり狙う一番の理由は、屈辱に違いないからだ。体操リボンはX字の軌道をUの字にして、最後のひとりに先まわり。

「こんなヤツとまともにやってられ、つうぐああ！ や、やめてくれ！ 頼む！」

首を捕らえ、もがく相手を引きずり寄せる。風紀委員長相羽瑞穂は、深呼吸の後に気合を溜め、リボンで空中へと放り投げた標的に飛びかかった。

「天・翔・乱・舞！」

右の蹴りあげで始まったはずの攻撃が、瞬時に左の踵落としになり、その最中にリボンに巻かれた男子生徒は地面に、強烈に叩きつけられる。

ズガガッ——ズドオオオオオオオオン！

呻く男子が複数散らばって転がる中央に、瑞穂は静かに降り立ち、右手に体操リボンを回収した。肩を竦め、やれやれと呟く。

「謝るくらいなら最初からしなければいいのに、ね。低能が無理をするからこうなるの」
足元にあった頭をぐりぐりと踏みつけてやる。

間もなく、遠くで待機させていた風紀委員の、下級生男子が一番に駆けつけた。

「委員長、お疲れ様です。あとはボクたち委員に任せてください」

「滞りなく頼むわよ、啓。後で報告書を提出しなさい」

他、数名のメンバーに事後処理を一任し、瑞穂は制服を拾い集める。若草色のブレザーにブラウス、スカート、学園指定のソックスと靴まで。

美女の肉感的なレオタード姿に、年下の少年が顔を赤らめるのも無理はない。

「出したくてたまらないでしょ？ ほおーら、こんなカンジ？」

尿道をこじ開けられ、膀胱と外との距離が一気に近づく。同時に排泄のスネッチがオンになってしまつて、アナルもうねり始めた。

「あくふうううう！」

たまらず下唇を噛んだ。リボンのステンレス素材が重たく、迂闊にお尻を振れば、送り込まれる圧力の波が大きい。かといって振らずにもいられず、アナルのリボンで、猥褻にしては優美な円を描く。始まつた生理現象はもう止められない。

「やめなさ、いよ、さつきから、んくはあ、あなた、調子に……いいいい！」

大腿筋が引き攣り、バランスを崩す。金沢に仕立て上げられた犬の放尿ポーズから一転して、受身どころではなく倒れた拍子に、グリップが床と激突した。

「かつはああああ!!」

涙の乾かない瞳で一瞬、白目を剥いて、唇から舌を限界まで出す。舌の腹は大量の涎をたたえており、粘性の雫を滴らせる。尻穴の出口付近で生じた刺激の、終着地点は、背骨にも達し、全身の神経に悦痺をばらまかれた。

「ひはあつ？ くう……うッ！ はあ……あつ、はあ！」

動悸が激しい。単純に用を足すのとは明らかに違って、肺の膨縮が早く、心臓はビートを奏でつ放し。悶え汗が噴き出し、肌とレオタードを蒸らしていく。

四肢の柔軟な瑞穂は、これ以上アナルだけは刺激すまいと、器用にでんぐり返り、急所のお尻を上に乗んだ。セックスの体位でいう「まんぐり返し」のポーズである。

乳果実が重力に引かれて、鎖骨へと乗りあがった。

「あふう、ふう……くっ！ あはあ」

色白の太腿は、香汗の光沢もあつて艶やかに映える。視界は反転して目線が極端に低くなり、観衆を見上げるしかできない、屈辱の姿勢だが。こうでもしなければ、肛門に体重が掛かってしまう。

自慢のストリートヘアは皆の足元に広がり、それを金沢の靴が踏んだ。

「随分と慣れてそうなポーズじゃない。みんなも見てよ、この女の汁」

瑞穂の秘部をほんの数秒弄くっただけ、の彼女の指が、透明の粘液を引く。あからさまに汗でも尿でもないエキスが、初心な入り口を潤し、堪え難い疼きを生み出す。

(ど、どうしたっていうのよ、こんなことで……)

女子にしてはオナニーの頻度は高い、かもしれない。しかし自慰の時にこれほど股座が濡れた経験はない。吸水性のレオタードは、三角州から着々と蜜を吸い上げ、薄紫色の生地を透かした。

「さつきより弄りやすそうね。こうかしら？」

「だっだからあなた、やめ……ひはあ？ あっだめ、んくふう！」

だめ、と拒絶する意志に反抗するように、牝の部分は蜜を湧かせる。瑞穂本人にも熱くて、漏尿と紙一重の分泌感が閃くたび、背筋がぞつと寒くなる。しかも金沢の指は、巧みに肉唇をのけて、もつとも過敏な粒身に擦る気配を添えた。

あとひと繋ぎの快樂電流を、そこで止められ、肉体は煩悶とさせられる。そのような浅ましい身体を、痛みで叱咤するように瑞穂は、抱え寄せた太腿に強く指を立てる。

「ぐっとう、誰が、はあ、こんなところ、で……ッ！」

壺口での浅い抜き挿しは恐ろしく残酷で、肉体が期待するもう少しの刺激を、寸前で止めてしまう。それだけ精神力も疲弊し、疼きの回数が多くなった。

金沢の連れがわざとらしく驚き、言いふらす。

「いわゆるアレか？ 相羽委員長つてのは、実はこーいう趣味があつたとか」

「ちっ違うわよ、あはあ……へ、変なこと言わないで？」

当然、本人は否定する。しかし陵辱者に自ら「穴はここです、弄ってください」と差し出すみたいな姿勢では、抵抗の仕草も言葉も、すべて説得力に欠けた。

「……ウソだろ、あの相羽委員長が？」

羨望のまなざししか知らない熟れた肉体に、初めて、軽蔑の目を向けられる。特に自分と同じ女子の、顔を背けてまで見ようとしめない反応には、さしもの気高い風紀委員長も感情を荒らした。

（惨めすぎるわよ……こんなのに！）

隠したい巨乳が砲弾のように飛び出し、ピン留めのネクタイを裏返す。喋ろうとすれば風紀委員の証であるそれを、下品に舐める行為になってしまう。

飾りだけの腕章も今は虚しい。

（変な女、つて思われてるんだわ……そんなはずなのに）

生徒たちはまだ半信半疑、の様子でも、思考はマイナスにばかり偏った。衆人の全員が沈黙しても、レオタード美女の肉穴はぬちゃぬちゃと粘音を立て、瑞穂は湿った吐息を散らしてばかり。

「あはあああッ？」

風紀委員長の弱点にぐりつと、金沢が指を二本も突き込む。

「こんな露出狂の女に風紀委員長なんて、任せてらんなくない？ こいつ、パンツ穿いてもないんですよ。変態つてヤッ？」

「ひはあつだめ！　そこ、そこはっ、あふうう！」

強い痺れが股関節に駆け巡り、反射で細腰がかくんと跳ねる。学園では常にレオタードで圧迫しているためか、始まってしまうと非常に感じやすい。

「勝手に人様の鞆開けるとか、ありえないし……」

肉豆を小刻みにタッピングされれば、快感はめまぐるしく連鎖した。いつの間にか肉体

は、感じる事が当たり前になっていて、恐怖の対象が違ってきている。

(こんなに激しくされ続けたら……わたくし、も、もしかして)

漠然と絶頂のイメージが浮かんだのを、払拭できない。頭がぼうっと過熱し、呼吸の激しさに溺れそうだ。高鳴る胸は双乳を揺らす。

蠱惑的なポーズも、トーンの高い喘ぎも、男子にとつては刺激が強すぎるらしく、そわそわと股間を隠す者も出始めた。

「ね、相羽。この格好でオトコに迫ったのって、何回くらいよ？」

「そんな真似するわけ……もつ、もおやめて！ あああそつそこ！ そこだめ！」

抗い疲れた瑞穂は、会話どころではなく、臨界を食い止めるのに必死だ。それも放尿と肛門決壊、女の絶頂のすべてに耐えなければ。しかし陵辱の手には容赦も加減もなく、立てた小指を尿口に挿し込んで、膀胱をつついてきた。

「ひやつあ、ああ！ らつだから、らめつていつへるじゃない……んぷああ！」

アナルがきゆうつと締まり、体操リボンを高く振りまわす。お尻の中に手が隠れているのでは、と思えるくらいにリボンは旋回し、直腸のうねりを拡大する。

ハイヒールの底では爪先が不自然に反りあがり、予兆めいた痺れが脚を伝った。

「やつ、あん！ もつ、もう、わつわたくし！ 無理よ、でれつ出ちゃう！」

まんぐり返しの姿勢でも、太腿と巨乳を弾ませて、汗まみれの肉体を自ら揺さぶる。意

識が朦朧として、輝きの衰えた瞳は半目がちに、少量の涙で睫毛を濡らす。

頬からこめかみに垂れる涎に自覚もなく、悶える瑞穂は、あられもない太腿を無茶苦茶に撫でさすっていた。

「もう十分かしら？ 後はご自由に、風紀の相羽」

「ひはあアツ？ あ……あつああ出る！ もう出るオシッコ、わはひオシッコ！」

金沢の指が外れても、ひくひくと、尿口が疼きを漲らせる。そこに熱水を流してしまいたい衝動に駆られ、出すと決めても、今更姿勢を改めてもいられない。

制服姿の男女が固唾を呑んで見守る中、レオタードにネクタイというちぐはぐの格好をした風紀委員長は、今朝一番の嬌声を張り上げた。

「おおおっおお！ おおうおうっオシッコおおおおおおおおおおおおおお！」

脳の中央をくり抜かれ、そこに真っ白な快悦がなだれ込む。

プシュッ！ チョロロツ、チヨロヂヨロヂヨロヂヨロヂヨロ！

噴射に勢いがありすぎて、薄い股布が右によれてしまう。

お尻から波打つリボンの隙間を縫うように、放物線は黄金色に輝いて、まんぐり返しで転ぶ失禁美女に雨を降らせた。窮屈な姿勢の中で細腰がびくびくと跳ねる。

チヨロロロロロロロロロロロロロロロ——！！

高熱を伴う放水に、敏感な女穴を溶かされていく。肉唇の合わせ目では、クリトリスを

六十度の摩擦が、こそばゆい性感帯を穿り、甘い痺れを引き起こす。

身体の中でごりごり、と別のモノが動く感覚に驚かされては、少年の手も振り払えないヒップを震わせる牝犬風紀委員長。

「あはあんっだめ！ そんなにしちゃ、あつ、ああやつ、ああ！」

付け加えられた尻尾で弧を描いては、排泄寸前の悪寒に背筋をぶるつとさせ、少年の陰毛に両手で掴まる。いつの間にか自分からも、犬のポーズを屈伸させて、ストロークを追跡する。牝痺れは目に見えて強くなり、ハイヒールの踵が自然に浮いた。

「ひあつふ、これ、これとめて！ おおっおかひぐ、わたくし、おかしくなりそお！」

始まった刺激の連鎖を止めようとすれば、強迫的な衝動に駆られ、腰を振らずにいられない。新体操選手だけあって、しなやかに肢体をくねらせ、臆奥に圧力を送り込む。

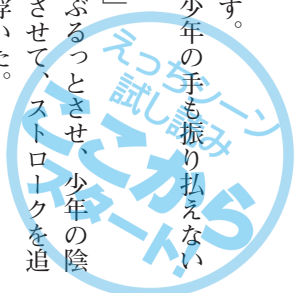
ぐちゃっぐちゃ、ずちゃ！ ぬちゅぬちゅ、ぐちゃり！

「とっとまっってください、はあ、ボク！」

瑞穂の股座に踏みつけられる啓が叫ぶ。そんなか弱い少年に、生唾を散らして、風紀委員長は括れたウエストをグラインドさせた。のけぞる細身の上では巨乳が転がり、どちらも突起を振りまわす。

「でっでも、あはあ！ だつてわたくし、っひあ、あくっんはあ！」

熟したメロンほどはある乳果実の、大きさと重量感が、ダンスに反動を持たせる。



暴れるお尻に連動して、曲線のついた太腿も脂を弾ませ、気持ち内気だった開脚は回数を数えるごとに大胆になった。

ずちゅずちゅずちゅ！

「あふあつはあ？ や……おつオシリ！ オシリにもつお、ひあつオシリ！」

アナルリボンで満点の螺旋を描いて、しとど濡れた薄紫色のレオタードをお尻の谷間に食い込ませつつ、青い髪をまた裏返す。認めたくない快楽に捕らわれて、抜け出せない瑞穂は、淫欲の一線を越えそうな表情を戒めるように、唇を痛く噛んだ。

全校生徒は風紀委員長の、人目を憚らない乱れぶりに騒然として、あとずさる者も多かった。白昼堂々の行きすぎた変態セックスから離れたい足音ばかり。

「まじで相羽委員長がやってんだよ、アレ……あんな嬉しそうなの？ カオしてるし」

「やだ！ 相羽先輩のこと尊敬してたのに、こんなことするひとだったなんて！」

これでは相羽瑞穂を印象づけるためのレオタードが、どこでも手軽にセックスを愉しむためのコスチュームに。

「ちっ、違いの、わたくし……っはあん！ ちが、そんなつもり、んふああ！」

弁解しようにも喘ぎに邪魔され、悩ましい嬌声で、皆の解釈を肯定してしまう。貪るのと変わらない淫ら腰も、なまじ筋力があるせいで、よく張った太腿を弾ませ、風紀委員長の名を貶めた。

ぢゅぢゅぼっ！ ずぼっ、ずぼずぼ！ ぢゅぼ！

窄まり、うねる肉褻の小道を、雁太が抵抗を最大に生みつつ、かき混ぜる。外に捲れた肉唇が発情汁を吐き出しては、茎胴もろとも膣口の裏側に埋没する。

「あっああい？ いったいまの、おおっおく、おくに当たっれ！」

より熱硬くなった怒張が、Pス.ポットをごつん、とかちあげた。ネクタイの末端から涎を滴らせ、強い痺れの奇襲に四肢を引き攣らせる。爪先で立つM字開脚のポーズに、尿の混じった大玉の汗をいくら流しても、肌は冷めない。

「カラダが、あっ熱くて、くふう！ はあっ、ど……どう、なっはの、わたくし！」

反身でレオタードを限界まで引き伸ばしたら、腰を返し、今度は後ろに突き出たお尻で得意の、リボン捌きを見せつける。ひりつく肛門も、快楽に浅ましい前の穴も、ひくひくとして、好物に吸いつくかのようだ。

いよいよ剛直が特徴的なエラを駆使し、濡れすぎた肉壺を攪拌する。

「委員長おっボク、そんなにされたら、でっれちやう！ れちやうよっはあ！」

「出ちやうって、何が……あっああ！ んあふっそこおお！」

摩擦を欲しがる粘膜褻に、肉体が期待する以上の熱痺を与えられ、口をついて出た台詞はまるで、おねだり。息乱す瑞穂も声のトーンをあげて、ペースをはね上げ、男の子の逞しい部分に夢中になっていく。

(だ……だめ、よ……わたくしは、さつきから……)

行為の自覚があるからこそ、背徳感に後方を断たれる。前方の肉悦に進むしかなくて腰をせっせと動かす。プライドをはずたずにされたうえ、肉体の強制的な官能に抵抗もままならない無力感、そして恥ずかしさに瑞穂は打ちのめされた。

(けどとまんない、とめ、られなく……つて!)

屹然とした顔つきは、締めりのないアへ顔を、あたかも本性であるかのように、衆目に曝け出す。唇の外側で舌をのたくらせ、肉交の快楽に酔う。力なく八の字に倒れた眉の下では、瞳がうつとりと、揺れ動く巨乳の向こうにある結合部を探していた。

「ひはあふ!! も……もうらめ、わたくし、わたくしが!」

わたくしが、の次に何と言いたかったのか自分でもわからない。甘美な肉悦に浮かんだ言葉を溶かされていく。とにかく、腰を振り続ければいらしい、ことだけは確かだ。

ぢゅばんっばんっばんっばんっ!

「あああんっすごいの! すごいのきてるっも、もうッそこまで!」

狂おしいよがり姿に催した男子連中が、我先にと朝礼台によじ登り、一切の躊躇なく肉棒を取り出した。両隣に一本ずつ、幹の太ったペニスが鎌首をもたげる。

「お……俺ガマンしてらんねえって! エロすぎて!」

腰を好き放題に暴れさせたくて、風紀委員長は「前足」を使って、それらをしつかりと

握り締めた。右手はグローブ越しに、左手はてのひらに直接、男の硬さと熱さが伝わってくる。オマ○コを独占する一本も負けじと脈打つ。

「委員長っボクの！ ボクのイクっ、はあ、イっちゃうよお！」

「ああん！ きっ急に動かないで啓……んあはっあはあ！」

先に動いたのは巨乳美女。粘着気味のレオタードの裏側で、ふたつの乳果を転がし、右に拠れたV字のハイレグカットを牽引する。醜く反りあがった二本を支えに、ロングヘアと細腰をハイペースで波打たせ、快感により強い快感を繋いでいく。

「んふはあっ、ああ！ もおらめ、らめなのわたくし！」

両手はそれぞれ小指を立て、幹胴の全長を比べる。最初に握った位置が違うことにも気づかずに、左のてのひらは亀頭を柔らかく按摩し、逆に右手は、グローブの保持力を活かして付け根をこしこし扱き降ろす。

ある程度は意識的に膣圧を変えられることを、肉交のうちに知って、快楽を高める方法ばかり獲得してしまふ。飲み込みの早い優等生は、難しい腰のダンスも上手にこなし、両足はハイヒールの踵でカン、カンと、金属製の朝礼台を小気味よく鳴らした。

「もっももおお！ もおオシリ、おおっオシリひつれる、はあ、いつへるかも！」

拡がりっ放しの尻穴がひとりでに収縮し、リボンを紐まで吸い込む。巢穴に戻るウツボのごとく、ステンレス仕込みの尾を振り、ぬかるんだアナルそのものを波打たせる。肛悦

は尾てい骨まで届いて、ぞくぞくとせずにはいられない期待を、背後に忍ばせた。同時に前の穴も、専用の涎をだだ漏れに、少年の弱点を苛烈に食い締め。

「委員長っ！ ボツボクもう、もうっはあ！ はあはあはあ！」

「わたくしもイク！ イクツイきそうなのっあふうん！」

自慰ではこうはいかない、深く届いて膣肉を甘く拡げてくれる、剛直の長さ太さに癖になる。頭は熱病寸前にぼうっとして、意識を重力とは逆の方向に吸い込まれそうだ。

「イクのっもうイク！ あんっいきたい……いついきたい、もおイかせて！」

風紀委員長は、露出の多い格好でも風に触れられないほど、肌に香汗をまとわせ、薄紫色のレオタードから飛び出す太腿を思う存分に躍動させた。

「アッハッハ！ この犬はチンポとジャーキー間違えてんじゃないの？」

金沢の台詞など耳をほとんど素通り。

「そっそう、チンポ！ チンポがおくっ、おおっおくにあたるの、すごいッ！」

やっとならせた卑語を連発し、握力を強める。左右の肉棒に掴まってでもないかと、肝心の結合が外れてしまいかねない勢いのグラインドだ。

ずばんっばんっばんっばんっ！ ばんっばんっばんっばんっ！

濁ったエキスが粘音を奏で、下半身の淫猥なキスを濃厚に思わせる。

柳腰をしならせるダンスは、相手の下腹部を恥丘で乱打するように荒々しい。年下の男

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>